JAPAN

日本文化概论

CULTURE

第三版

韩立红 编著

南開大學出版社

日本文化概论

（第三版）

韩立红　编著

南開大學出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日本文化概论 / 韩立红编著. —3 版. —天津：南开大学出版社，2018.12
ISBN 978-7-310-05699-6

Ⅰ.①日… Ⅱ.①韩… Ⅲ.①日本—高等学校—教材 ②文化研究—日本 Ⅳ.①H369.39

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 278819 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行
出版人：刘运峰
地址：天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码：300071
营销部电话：(022)23508339 23500755
营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200
*
唐山鼎瑞印刷有限公司印刷
全国各地新华书店经销
*
2018 年 12 月第 3 版 2018 年 12 月第 1 次印刷
210×148 毫米 32 开本 11.125 印张 295 千字
定价：35.00 元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

本书部分章节为天津市社会科学基金重点项目之成果，项目号为 TJSL18-001；本书同时还获得“天津市高校人文社科重点研究基地南开大学区域国别研究中心”（C029189002）的资助。

序　一

我国大学的日语教学界自20世纪80年代末逐步开始了与国际日本语言文化教学模式接轨的变革，其重要内容之一是在日语语言文学专业本科生的教学课程体系中加大日本社会文化课程的力度，在研究生培养中增设日本文化研究方向，旨在拓宽学科领域，培养适应21世纪社会发展需要的复合型、通用型人才和高素质的创新型人才。然而，我国重点高等院校中的日本文化教学和研究虽然取得了有史以来的最大发展，但是关于日本文化课程的教材建设却明显滞后，迄今为止国内还没有一本以日语写作的点面有机结合的《日本文化概论》教材。

据我所知，我国现已出版的有关日本文化的部分教材，大多是讲述日本的衣、食、住、行等生活文化以及日本的茶道、花道、歌舞伎等方面内容的，这些基本知识对于日语语言文学专业的教学无疑是不可或缺的，但如果仅停留在介绍这些日本文化的表象，则不能使学生综合而深入地了解和把握日本文化的精髓及其特质。韩立红博士用日语编著的这部《日本文化概论》教材，正好解决了这一问题，具有填补空白的意义，今将出版，实为可喜可贺。

《日本文化概论》这部教材是韩立红博士结合自己多年的研究和文化课教学实践，花费了四年时间编著的。我作为第一个读者，读后受益良多。它不仅在体例方面有诸多创新，而且在内容论述方面颇见深度。作者从日本的精神文化入手，从日本文化的基本特征——开放性开始，到生产方式的稻作文化特征、基于“家制度”的纵向型社会结构和重实用的文化心理结构特征，以及天皇崇拜的历史根源等，层

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

次分明地展开论述，不仅论及日本的哲学、宗教、文学艺术、教育、风俗、技术、科学等几乎所有的文化领域，而且提纲挈领地概括了日本文化的特质。同时，该著作对有关“日本文化论”及“日本人论”的日本学者及外国学者的重要学术观点也进行了分析评述，诸如中根千枝的“纵向社会的人际关系”理论、土居健郎的“依赖心理结构”理论、本尼迪克特的“耻感文化”论等日本文化研究领域具有代表性的学术观点，均在本书中有所论述。

多年来我一直思考一个问题：同为人文学科，为什么外语学科出身的人既能够出季羡林先生那样学贯东西的大师，而从一般意义上说外语学科学生的综合人文理论水平和问题意识，与文史哲专业出身的学生相比却又有一定的差距。近年来对这一问题似乎想明白了些。即是说，对于外语学习者来说，学习一门外语就意味着要掌握母语以外的另一种语言所构筑的一整套文化传统，“获得一种新的对世界的看法”，因此它比其他文科学生多了一种文化参照系，有利于其人文思维的发展；但是另一方面，外语学科的学生进入大学后必须将大量时间用于练“外语功”，且其方法多以“模仿”为主，久而久之就会形成一种“趋同思维定势”，这无疑又不利于其人文思维的发展和思辨能力的培育。因此外语学科的学生要提高人文素质和思辨能力，就必须加强文化课的教学，并在教学中特别注重对对象国精神文化的特质及其形成原因和逻辑的探究和分析。韩立红博士的这部《日本文化概论》，就是以考察论析日本精神文化的特质为主线展开的，其目的是以此激发学生对日本的思想、宗教、历史、政治等人文问题的关心和研究欲望，激励学生对其与本国文化关系的思考和学术兴趣，这对于培养新一代日本问题研究者所必要的思辨能力和创新意识，无疑大有裨益。

为了扩展学生的知识面和增强其对日本文化事象的解析能力，该书还穿插了“关联知识”，并将具体的文化现象与其特质相结合展开论析，做到了既涵盖面宽，又理论联系实际；既突出了重点，又照顾到了相关的“面”。特别是其“以点带面”的著述方法，较好处理了“点

与面”“深度与广度”的关系。例如，作者在论述日本文化的基本特征——开放性和主动性时，不但论述分析了日本文化形成和发展进程中的“开放性”和“主动性”特点，还以点带面，将日本历史进程中几次大规模吸收外部文化的史实和内容，以及体现在现代日本文化中的外来文化和日本固有文化的变异内容一并编在书中，让学生不是空洞地增强理性认识，而是“有血有肉”地认知和把握日本文化的性质和特征。

我相信，本书的出版必将为中国日语语言文学学科的文化课程的建设以及日本文化研究者的培养做出很大贡献。

北京大学日本文化研究所所长

刘 金 才

2003年盛夏，于北大蓝旗营书斋

序　二

本書の著者韓立紅博士は、10 年ほど前に南開大学より立教大学の大学院に留学し、日本文化研究に研鑽を重ねておられました。そのおり博士は、日本近世中期の石田梅岩の思想に関心を持たれ、当時武蔵大学人文学部日本文化学科（現在は日本・東アジア比較文化学科と改称）に勤務中で、石田梅岩とその門流たち、いわゆる石門心学と呼ばれる思想を研究対象にしていた私の研究室に来訪され、私と共に約一年間、心学関係資料を研究されました。

ちなみに石田梅岩は農家出身でしたが、京都の商家に町人として勤めながら、まったくの独学で中国より日本に伝えられた儒学哲学を基礎にし、日本の神道・仏教の思想をも取り入れて、倫理道徳と経済との在り方について、独自の哲学を主張した人物です。博士の優れた日本語の能力とも相まって、その研究成果は中国に帰国後、『石田梅岩と陸象山思想の比較研究』として出版されました。同書は、博士を含めた南開大学の日本研究の質の高さを示すものと言えます。また私の定年後の 2003 年 2 月には両大学の間で、相互の「留学協定」が結ばれ、より一層関係が深くなったことは慶賀の至りです。

韓立紅博士は、その後 2004 年 4 月に東京のぺりかん社より、私と山本真功氏共編の「季刊　日本思想史 65 号」の「特集　石門心学」に、「中国における石門心学思想研究の現状とその展望」を発表され、さらに国学院大学の海外招聘研究員として来日中にも、2005 年 11 月 12 日の石門心学会において、「石田梅岩と陸象山の思想構造の比較」

の題で研究を発表されました。この二つは日本の専門研究者からも高い評価を受けております。

以上に私が博士の専門研究分野の業績について触れた理由は、このような諸研究を基礎にした上で、巻末の「人名・書名・文献名索引」からもうかがわれるように、博士の日本文化全般にわたる幅広い関心と研鑽の成果が、この『日本文化概論』と名づけた本書となって結実した点を強調したいからです。

本書の執筆目的や、構成と内容については、北京大学の劉金才先生の、まことにご懇切かつ適切なご紹介があり、私がこれ以上に付け加える必要はありません。一言付加するならば、中国の過去から現在に至るまでの諸文化について、日本の学生に教授するときに、このような現代の中国社会と人々の日常生活にも広く目配りした書物、例えば『中国文化概論』とでも題すべき書物を、はたして日本の若い中国研究者が書けるか否かという疑念を禁じえないという点です。

韓立紅博士の日本文化教授への熱意から生まれた労作に、心から敬意を表すとともに、この書を機縁に中国と日本との相互理解が、若い人々の間に深まることを期待いたします。

武蔵大学名誉教授
今井淳
2006年2月

前　言

这本书的第一版，是笔者自1998年开始讲授大学三年级日语本科生的日本文化课时，开始摸索编写的。以往的日本文化教学，教师大多是为学生讲授一些有关日本人的衣食住行的简单概况，从“和服”“生鱼片”“榻榻米”“富士山”到“茶道”“花道”“日本人的一生”，这些内容虽然也是学生应该掌握的知识，但毕竟是一些零碎现象的罗列，没有一条主线将这些现象串在一起，课程显得有些单薄浅显。

如果没有让学生理解日本文化的精神核心是什么、日本文化的基本特征是什么，日本文化课也只能说是完成了一半的任务。

本着上述的想法，笔者在接手这门课时，便开始为学生寻找合适的教材。寻找过程中发现：一些国内已出版的有关日本文化的书籍，只是一些相当于“日本概况”的对日本文化现象的粗浅介绍；而有些关于“日本文化史”的书籍，或偏重于历史脉络的梳理，与“日本历史”课存在重复，或偏重于学术的研究、阐述，对本科生而言，有些深奥难懂。而日本学者编写的一些原版书籍，用来借鉴参考很有裨益，但整本挪借、翻译作为教学用书并不适宜，而且，一些涉及历史观的问题，也不适合“拿来就用”。于是，笔者便尝试着自己收集资料，参考各位中日名家学者的专著，自己编写教材。

因为本书是为日语系本科高年级学生编写的教材，所以全书采用日语写作。本书在编写过程中，参考了大量国内外有关书籍，为了方便学生阅读，书中部分内容加上了注释，并在书后附有日本文化史年表、人名索引和书名索引。经原作者同意，书中的部分图片使用了舛

谷锐、小早川真理子所著的《用中文介绍日本文化的书》(『日本文化を中国語で紹介する本』)中的一些插图，在此，向他们表示感谢。

本书第一版于2003年底出版后，即受到高校日语专业师生的欢迎，在短短 2 年内成为多所大专院校日本文化专业考研指定参考书。后笔者根据读者使用情况的反馈，删改了部分章节，增添了有关现代日本文化的内容，于2006年推出第二版，继续成为广受日语学习者欢迎的长销教材，印数达5万多册；2008年应很多师生建议和实际学习需要，笔者编著了本书的中文读本，为学习日语专业及考研的学生提供了对照学习的便利；中文版销量至今已超过 1 万册，使这一教材具备了更大的延展效应。

现距离第二版问世已超过10年，无论是国际社会大环境、日语教学侧重点，还是高校授课方式、学生素质水平，都已经发生了新的变化。因此，笔者与南开大学出版社达成共识，对本教材进行再次修订，为《日本文化概论》这一教材注入新的活力。

本次修订，主要是围绕纸质课本增添了多媒体学习辅助功能——笔者结合近几年教学实践和社会环境的变化，对重点章节的内容进行了更新和调整；结合近年来数字化教学的需要，为教材配备了慕课学习平台，使学生在课本之外，还能在移动终端上，通过视频课件和课后练习巩固课堂知识、理解日本文化；笔者结合近几年日本文化热点，将自己授课过程中与学生的互动成果进行了汇总和筛选，在重点章节旁加入了二维码链接，使学生在课本外还能获取更为新鲜生动的补充材料，拓展同学们对当代日本的认识。

本书再次向以下各位表示感谢。南开大学外国语学院各位同仁，以及当时的外籍教师深町和美老师；2003 年为本书日文第一版作序的北京大学刘金才教授，2006 年为本书日文第二版作序并逐页审阅的日本武藏大学今井淳教授，2008 年为本书中文版作序的当时中国日语教

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

学研究会会长修刚教授。今年第三版即将面世，一并感谢为日文第三版编辑各种试题的马兰兰同学和赵雅萌同学以及南开大学出版社各位老师！

编者

2018 年 4 月

目　次

第一章　日本文化の基本的な特徴——その開放性と主体性 / 1

一、日本文化の開放性と主体性 / 1

二、基本的特徴の形成要因 / 9

三、大化改新と隋唐文化の吸収 / 12

四、明治維新と西洋文化の吸収 / 19

五、敗戦とアメリカ文化の吸収 / 27

関連知識一 / 34

1. 朝鮮文化の吸収　　2. インド文化の吸収

3. 南蛮文化の吸収　　4. 蘭学の吸収

第二章　稲作文化の特質 / 40

一、稲作文化の上陸 / 40

二、集団主義の形成 / 41

三、親植物性 / 44

四、繊細性 / 48

五、勤労性 / 52

六、自然への順応と多神論 / 53

関連知識二 / 56

1. 稲作と相撲　　2. 米と日本人の食生活

3. 日本の家屋　　4. 日本人の衣生活

5. 日本人の好きな植物

第三章　「家」を基盤とする「タテ」の社会構造 / 76

一、「タテ」の社会構造 / 76

二、日本の「家」制度 / 83
三、中日の「家」制度の比較 / 86
四、日本の「家元」制度 / 90
関連知識三 / 92
1. 日本企業の三大特色　2. 日本人の社会生活
3. 日本人の人間関係　4. 日本人の暮らし
5. サラリーマンの世界

第四章　実用を重んじる文化心理 / 112
一、日本人の「即物主義」的な性格 / 112
二、日本人の「実用主義」的な宗教観 / 118
三、中国儒学の吸収 / 129
四、日本の儒学 / 135
関連知識四 / 147
1. 日本の新宗教　2. 神道と日本人の生活
3. 仏教と日本人の生活　4. 多元化した日常生活

第五章　日本人の「無常」観 / 170
一、「無常」と日本文学 / 170
二、「無常」と日本人の危機感 / 175
三、「無常」と日本人の死生観 / 178
四、「無常」と日本人の美意識 / 181
関連知識五 / 185
1.「もののあはれ」　2.「幽玄」と「わび」「寂」
3.「いき」　4.「幕の内弁当」

第六章　天皇崇拝の伝統 / 187
一、天孫降臨と国体思想 / 187

二、天皇崇拝と儒教の「忠孝」思想との結合 / 192
三、象徴天皇への変貌 / 194
四、日本の歴史 / 196
関連知識六 / 205
1. 皇室の歴史　2. 元号　3. 国学と尊王論
4.「君が代」と「日の丸」　5. 天皇の国事行為
6. 天皇、皇后、皇太子、皇太子妃

第七章　日本人の「甘え」 / 211
一、「甘え」の文化心理 / 212
二、「甘え」の人間関係 / 215
三、「甘え」の社会体制 / 219
四、「甘え」の病理表現 / 221
関連知識七 / 226
1.「感謝」にも「謝罪」にも使う「すみません」
2.「悔しい」と「甘え」　3.「気がすまない」

第八章　「恥」と「義理人情」 / 229
一、日本人の「恥」 / 229
二、義理人情 / 234
関連知識八 / 240
1. 相克する「義理」と「人情」
2. 近松の作品に見る「義理」「人情」
3. 赤穂事件と「忠臣蔵」　4. 現代の義理人情

第九章　日本人の「道」思想 / 246
一、武士道 / 249

二、茶道 / 252
三、華道 / 258
四、書道 / 263

第十章　現代日本に関する知識 / 266
一、ノーベル賞の受賞者 / 266
二、新聞とテレビ / 267
三、雑誌と本 / 269
四、漫画とアニメーション / 269
五、音楽家 / 270
六、美術家 / 272

第十一章　外国人による日本論の名著 / 273
一、戴季陶『日本論』 / 273
二、周作人『日本管窺』 / 278
三、R. ベネディクト『菊と刀』 / 283
四、E. O. ライシャワー『ザ・ジャパニーズ』 / 288
五、李御寧『「縮」志向の日本人』 / 292

付録一 / 297
付録二 / 301
付録三 / 305
付録四 / 308
参考文献 / 315
人名索引 / 320
書名・文献名索引 / 332

第一章　日本文化の基本的な特徴
——その開放性と主体性①

一、日本文化の開放性と主体性

東アジア文明圏或は儒教文明圏、西洋のキリスト教文明圏、西アジア——中東のイスラム文明圏と南アジア仏教——インド教文明圏とが、世界四大文明圏と呼ばれている。その中で、歴史が悠久で、範囲が広大で、成果が輝かしく、影響の深い東アジア文明圏の核となる文明は、中国から発し、中国で形成されたことが分かる。文明の軸心国家たる中国は、常にその周囲の国々に対し影響を与えてきた。

中国文明は、漢民族を主体とする中華民族が、長い人類歴史の発展の中で東アジア大陸という土地の上で、大自然と戦いながら形成してきた文化である。中国文明は、独立的に自主的に独特の伝統文化を創り出し、何千年間の発展を経て春秋戦国時代——所謂中国文明の「軸心時代」——に至って、その基本的な形ができ、秦と漢を経て最終的に定着した。以後、宋代と明代の時期に至って変動があったが、従来の範囲から抜け出せなかった。この文明が自主的に独立

①この章の内容は主に武安隆氏の『文化の決択と発展』（天津人民出版社，1993 年）という著書を参考としている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c